



ピクタインダオン

(おきみがりにぼし)

第45号

発行日 2024年3月1日

発行人 矢代 しず

秋田市御野塩7-1-29-305

ひこばえ

稲刈りが終わった田んぼに

青苗のようなひこばえが生えている

若々しい葉が風に吹かれてなびき

明るい草原のよう

涼から冷に変わる空の下

ひつじ田に雫しさが漂うころ

連なるひこばえは

行く秋を葉身で感じとる

ふいに静寂を破るトラクターの音

稲株が刃物の鋭さで掘り起こされ

腐熟をはかる秋耕がはじまる

やがて殺風景な田んぼに

白鳥のしゃがれた声が落ちてくると

白い冬が大の字に横たわる

鴉

重厚な鶯色の箱を開け
ページをめくると

風景が一気にひらいた

オイスター色の空

東北の景色だろうか

山峡にただよう寂寥感が静かによせてくる

ガアゝ ギアゝ

七羽の鴉の

不吉な鳴き声が落ちる

光と影の変化を察知したのだろうか

鴉の群れは

空を滑降

すぐに舞い上がり

急旋回

ざわめく飛翔音

機影に似た鋭いかたち

不穏さを浮遊させて――

空が薄紅色に染まりはじめると

手をつないだような山脈も

赤や青の大地も

鮮烈な深紅の夕景にうるんで

鴉も

鶯色の箱のなかに沈んでいった

*画家・福田豊四郎の「山脈（からす）」を見て

秋田魁新報2023年10月25日号より



福田豊四郎「山脈 (からす)」

1941 (昭和16) 年

紙本着色 二曲一隻

縦216.5 cm ×横178 cm

第4回新文展出品作

図2

絆

十一月上旬

友人に会うため

二泊三日の旅に出る

直線距離で三三八km

長い道のりは

私たちを隔てる厚い壁でもあった

最初の友人は留守だったが

四十五年前の記憶を頼りに家を探す

かつて

向かいのアパートで聞いた

バイオリンの音色が脳裏に去来する――

次は十七年ぶりの親友

信頼が固い友は

優しさに満ちた笑顔

遠い記憶を手繰り寄せ
若き日に戻った私たち

最後は一回り上の先輩

いまも柔らかい物腰で

三十年の歲月は

先輩を少しも変えてはいなかった

(泊まってよ)

ハグし合った

力強い手の感触が忘れられない

地図を開き

友情を旅した時間をなぞる

絆は遠く離れていても

途切れることがなかった

絆は色褪せない――

夢路

川のかたちの道が
遠い時間へとつづいている

電信柱が並ぶ田舎道の
路地を曲がると
染物屋 五十集屋いさばや 駄菓子屋
指物屋 桶屋 鍛冶屋 酒屋
電線は風景を鮮やかに結ぶ

庭先でシュミーズ姿の
母が洗濯をしている
タライのなかには
貧しい暮らしの影が滲んでいる

幼いわたしは
ギッコンバツコン

手押し井戸を漕いでいる
井戸の口には
金気を除く手ぬぐい

夢は
いつも色あせることもなく
わたしの感受の襷に下りてくる

赤い鶏冠とさか
山羊の鳴き声
干し草の匂い
乾いた土の感触
消えないうちに
夢を掬い取りながら
遠い記憶を歩いていく

鳶の家

一月のある日

女は赤い車に乗っていた

道路が渋滞し

間延びした時間のなかで

女の手は忙しく

リズムを刻んでいた

あたりを見回し

道筋に家並みがそろそろ

街路樹の陰で

ひっそりと息づく

古い家が眼にとまった

ガレージは赤茶色にやつれ

ブロック塀は黒い染みをにじませ

雪寄せの跡もなく

人の気配もない

寒寒とした荒寥感がただよう

壁のアイボリーには

鳶が跋扈し

勝ち誇ったような

無尽蔵の勢い

ただ

鳶の触手を逃れた

一枚のガラス窓だけは

寂しさを内包した

小舟のように浮かんでいる

そのとき

女は

睨みを利かせた鳶の眼つきに

ギクツと心を衝かれ

物の怪を感じた

瞬間

鳶がアイボリーを這いだし

アメーバーのように形を変えながら

女の赤い車めがけて

くねりながら近づいていく

襲われる！

レモン色のコートが騒ぐ

クラクションが泣き叫ぶ

黒い帽子はうろたえ落す

鳶は

車の屋根に這いあがり

吸盤の巻きひげで絡みつき

車全体をきつく縛りあげた

視界をふさがれた車内は

恐怖の暗闇につつまれ

女は雷に打たれた雑木のように

こわばった表情で

方途を失った

女の血走った眼が宙を泳ぐ

とっさに

バックミラーを覗くと

鏡の向こうは視界がひらけ

いつも通りの光景

車が

ゆるやかな曲線を描いて流れている

正面の

フロントガラスから射しこむ光は

白昼の色

滑らかによどみなく

前方には

開放感あふれる

明るい空間がうまれ

こわばった時間が過ぎ去ると

女は

素早く

アクセルを踏んだ

徒然のエチュード 42

①
だるく

疲れやすい

なんとなく不調で受診した

ドクターは

寝過ぎですね！

高齢者に多いようです

睡眠をコントロールしてください

雪よせ

年末の大掃除

そして

ティータイム

暖かい部屋は

チヨ一心地よく

いつの間にか

椅子に座ったまま

うたた寝

眠りの誘惑に弱い

わたしは

本当の高齢者！

②

「黒ごまたっぷりあん餅」

たっぷりなのはどっち？

③

洗面台の棚が空いた

青い洗顔フォームの隣に

白い歯磨き粉を

並べて置いた

一日目

青い洗顔フォームを

歯ブラシにつけ

口の中へ

ひゃあゝ

二日目

ひゃあゝ

口に入れる前に気づいた

三日目

棚には

歯磨き粉だけ

④

歩道を歩きながら

惚け防止をしている

やってくる車のナンバーを

即座に計算

足したり掛けたり

その日の気分でいかようにも

でも

動体視力の前に

記憶力が……

⑤

週に二回は食べる

あじまん

あんこも積もれば

いつしか

私はあんこ姫になる

どすこい

どすこい

(° o ° ;)

【ご案内】

第十四回 「ピッタの会 現代詩勉強会」

講師に若木由紀夫氏をお迎えし、左記の通り勉強会を開催いたします。演題は、「詩と歌の交差点」です。

質問コーナーを設ける予定です。ご参加をお待ちしております。

日時 五月十一日（土）

時間 午後一時～三時半 無料

場所 あきた文学資料館

申込 参加希望者は五月四日（土）までに、

矢代レイにご連絡ください。

なお、資料準備のため、必ずお申し込みください。

☎ 090・1935・1180

【ご案内】

矢代レイ詩展 ―しなやかな言葉―

日時 7月1日(月) ～ 7月31日(水)

時間 9時～15時 無料

場所 秋田銀行本店 ロビー

秋田市山王3-2-1

なお、土曜日・日曜日・祭日はお休みです。
お問い合わせは、矢代レイまで。

☎ 090・1935・1180

【あとがき】

新しい年も足早に過ぎ、もう三月。いつの頃から時を早いと感じたのであったか。齢を重ねるごとに時は駆け足で、何かに突き動かされたようにサツと通り過ぎてゆく。

若い時は人生を馬拉ソンに例え、長いスパンで考えることが出来ていた。七十を超えた現在は、この先を否応なしに考える。どのように生きたいのか、なにをしたいのか――。

日々を、赤児を抱きしめるように、丁寧に生きていきたい。

*

降雪が極端に少ない今冬。クマは冬眠を忘れ、戦も未だに終わる心配がない。

せめて心の器を磨き、春の海のように穏やかな光る水で満たしたいと思っている。

